

り南へ、ほそき入江也、鹽越の松とて此あたりにあり、是より越前の浦濱なり、

罪深き身はほろぶやと音にきく蓮の浦は行てだにみん

竹浦 蓮の浦より東にたちばなと云宿あり、是より北にあたりて竹の浦有、

音に聞竹のうら風吹たて、眞砂にあそぶ秋のかりがね

小鹽の浦 思ひきや小鹽の浦のとまやにてね覺に秋の月をみんとは

篠原 あたかの浦とたちばなの間なり、俊成卿のうたに、

世の中はうきふししげき篠原や旅にしあれば妹夢にみゆ

高濱 都だに跡たゆ計ふる雪にこしの高濱思ひこそやれ

白山 此山越前にかゝりたる大山也、東は越中、南は飛驒境といへり、山頂に子蛇が池とて有之、

みどりの池ともいふ也、白山權現の御事、神社の部にくはしく書記せり、富士の雪はきゆる日定

りたれど、白山の雪はきゆる日なし、常住絶頂には雪有之、古今別のうたに、みつね、

消果る時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける

籠の渡り 是白山の中宮にありといへり

徒にやすくも過ぬ山伏の籠の渡りも哀なるよや

印の竿 北國にはをしなべてある事なり、初雪の時、竿を立て、そのとしの雪のふかさを知也、

初雪に印の竿はたてしかどそこともみえぬ越のしら山

〔延喜式兵部二十八〕諸國健兒略 中 加賀國五十人

〔三代實錄光孝〕元慶五年八月十四日庚寅、加賀國言、太政官去六月二十九日、下當道符、稱比日兵庫

有鳴、著龜告云、北境來乘、可有兵火、自秋至冬、宜慎守禦者、謹檢去弘仁十四年、分越前國置加賀國、其

後五十八年、未備非常、伏望請被給官庫甲冑、以備非常、自餘兵器國宰將作者、勅甲冑宜令國宰作焉、